

グスタフ・マーラー

アンリ＝ルイ・ド・ラ・グランジュ

丸山正義*訳

2 少年時・世界と自分自身を求めて (1860—1874) (1)

《この時代から受け取った精神的な体験と時代の痕跡が私の未来の人生にその形式と内容を与えた…》

イーグラウにやって来たときベルンハルト・マーラーは、市場の開かれる広場のすぐ近くにある、ピルニッツァガッセ265番地（後に4番地になる）の2階部分に貸し出されたアパートマンに落ち着いた¹⁾。10数年後の1872年、彼は家族ともども仕事場を隣家に移した（264番地、後の6番地）。ベルンハルトがこの家を買って求めた未亡人のフィッシャー夫人（旧姓 Proksch²⁾）は、市立劇場の指揮者ハインリッヒ・フィッシャーの母で、彼女のおかげでグスタフは初めて音楽の感動を知ることになる。ところでベルンハルトはその6番地の店と倉庫を買取る随分前から借りつもりでいたらしい³⁾。264番地の家はベルンハルトの終生の棲家となるが、広く住み心地が良かった。この家は現在でも相変わらず、他の2つの建物の母屋となって通りに面している⁴⁾。それらの建物は中庭の右の角に位置し、その中に醸造所と倉庫があり、2階はいくつかの使用人の部屋になっている。住居となっている家の1階はカフェであり、ベルンハルトと家族は3階に住み、4階は貸し出している。マーラーが少年時代を過すアパートマンは大きな台所と控え室、共用の部屋が2つ含まれている。居間はビロードが張られていたが、それは当時としては当たり前のことであった。この家の主人の自慢の的であるガラス戸の付いた本棚や、マーラーが練習用に使っていたグランドピアノとともに、ガラス製品や陶器で一杯のガラスの飾り棚が居間の貴賓席に君臨していた。

グスタフはまだ小さな子供の頃から音楽に敏感だった。イーグラウからレデツチュに旅したとき絶えず泣き叫んでいたこの赤ん坊は、両親が代わるがわる彼を腕に抱きながら荷車の脇を歩き歌を歌ってあげると泣きやむのだった。彼は歩き方を覚えるより早く、聞いた歌を歌い返すことができた。間もなく彼はイーグラウやこの地方の誰もが知っているドイツやチェコの沢山の民謡を空で覚えてしまう。

この街の状況は、専制政治の気紛れが原因であるとしか説明し得ないのだが、ドイツ語とチェコ語の2つの言語と文化が数キロ毎に折り重なり地図上にモザイク模様が描けてし

* 一般教育 専任講師 フランス語

まうというこの国に典型的なものだった。例えばこの時代イーグラウではドイツ語地域は南北にせいぜい30キロほどで東西にいたっては町の北方数キロのところにある地域だけが20キロほどに達するにすぎない。だからこの町は散歩をすればすぐにも足を踏み入れてしまふチェコ語の村々に取り囲まれている。ところがマーラーの生誕地であるカリシュトはチェコ地方にあり、プラハへの国道に面した北西部30キロのところ、ということはボヘミアということになる⁵⁾。マーラーは少年時代チェコ地方に何度も滞在することになるが、それは彼の祖父母のいるレデツチュ、従兄弟たちのいるドイチュ・ブロット（その名にかかわらず完全にチェコ語の村）、ウラシムのフランク家、のちになっては、フンポレック近郊のゼーラウ [Želiv] の友人であるエミール・フロイントの家である。

マーラーの少年時代はこのようにドイツの伝統的な文化ばかりではなくチェコの民族文化にも囲まれていた。「マーラーはまだ小さい頃、チェコ語しか話さなかった。チェコの民謡は彼が交響曲の旋律を工夫する際にかなりな影響を与えていた」と、ハンブルク時代のマーラーの親友、チェコ人の作曲家ヨーゼフ・ボフスラフ・フェルスターは書いている⁶⁾。それにまた彼は、家の使用人の中に多くのスラヴ民謡を知っているチェコ人がいて子供のマーラーのレパートリーを豊富なものにしてくれたと付け加えている。もちろんこのような情報は彼がマーラーその人から得られたものに他ならないだろう。ベルンハルトの使用人中少なくとも二人のチェコ人がいると警察調書にある、一人は料理女のアントニ・スタミック、もう一人は乳母 [Amme] のアントニ・ベルカ。おそらく後者の女性が、子供のグスタフにチェコ民謡、子守歌、ロンドなどを歌って聞かせ、彼の注意を大いにひいたものだろう⁷⁾。この年端もいかない少年はフィッシャー家の子どもたちの乳母であるナンニの語って聞かせるお話にも並々ならぬ関心を示した。彼女のレパートリーは広範で、後にマーラーの最初の重要な作品のもとになる Das Klagende Lied『嘆きの歌』と題されたもの悲しい物語も含まれている。

しかし民謡ばかりがイーグラウ地方で開かれた音楽形式ではない。旅芸人の音楽集団 Bohmische Musikanten も数多くみられる。のちにマーラーはたえずこのことをほめかすことになる。これらの集団の大半はヴィオラ、クラリネット（だいたい変ホ調の小型クラリネット）、コントラバスという編成で、中には、金管楽器を、おおむねトランペットだが、含むものもあるし、ボヘミアの南部や南西部では風琴であることさえある。またクラリネット・ハーブの二重奏もあり、それゆえに、この地域ではハーブの名人芸のすばらしい一派が形成されもした⁸⁾。

特に結婚式に踊られる民族舞踊はおおよそ異なったサイズの《フィーデル》族 [Fideln もしくは Fiedeln] で編成された弦楽器のアンサンブルが伴奏となっている。この楽器はいわばヴァイオリンの民族楽器というかヴィエールの一種で、弓は台形で共鳴板と裏板は平たい。鋭く刺すようなその音色が特徴となっており、『第四交響曲』の第二楽章でマーラーが独奏ヴァイオリンを移調して似せようとしたのがこれである。夏になるとイーグラウの森の空き地で農民たちはこの《フィーデル》の音に合わせて踊るのである。

131 幼いマーラーは次第に父の家のすぐ近くにある兵舎から聞こえるラッパや軍楽を意識す
(60) る。子どもたちも軍楽隊の稽古やコンサートに列席することができたからである。それはそれとしてこの地方では、軍隊とは関係のない管楽アンサンブルがある、これはおおよそ

チェコ人独特の管楽器に対する生まれながらの才能を軍隊に入ってから気がついてその才能をのびした音楽好きの退役軍人からなっている。これらの集団は結婚式や祝賀パーティーで聞かれたのはもちろんのこと埋葬の際にも演奏された。このような役割を兼用する音楽が、マーラー音楽のもっとも印象的な特徴の一つである名高き《スタイルの混淆》の源泉の一つであろう。こういった環境で彼が6歳の時に書いた最初の作品が『葬送行進曲の序奏をもつポルカ』と題されたからといって驚く必要があるだろうか。そのうえイーグラウ北部の村々で踊られる民族舞踊にまでこの奇妙な《スタイルの混淆》が入り込んでいる、つまりここでもっとも有名なジャンルの一つがZaloby [《嘆き》] と言われているものなのだが、これはほほえましい《レントラー舞曲》を演奏しながら、楽器は《呻きそして泣く印象を与え》なければならぬのだ⁹⁾。

マーラー自身の少年時代の印象に関して、彼の作品の起源を考えると、重要視しなければならない大切な証言がある。マーラー自身の証言ではあるが、もちろん彼がここで語っているのは彼の最初の伝記作家の一人であるリヒャルト・シュペヒトの口を借りていることは確かだ。シュペヒトは1905年マーラーの口述をもとに書いたモノグラフィーの小論で以下のように書いている。「マーラーが心底民謡に惹かれるのは、好みの問題ともいえるが、そればかりではなく、若い頃に受けた印象の結果なのである、それらの印象が後に彼自身の作家としての発展に貢献した。そのような言い方は逆説的に聞こえるかもしれないが、マーラー自身以下のように主張している以上、主観的ではあるが正当化される。自分にとって後に豊穡なものとして眼前にあらわになったのは、基本的に、実際に体験してきた出来事、子供時代の内的な、そして外的な経験であり、人間に関してであれ芸術に関してであれその他のどんな印象も、この生きづく無意識の種子から外れてしまえば生産力はないものとみなすことができた。それゆえその後のできあがった創作物はどれもその種子から生まれた収穫物にすぎないのだ、そしてまさにそれが、彼の製造物なのである。彼が6歳のとき何百という民謡を女中から教わって知っていたので、ちょっとした神童扱いされていたということを知らなければ、また、子供時代を通して、彼は日がな一日兵舎に通いつめたことを知らなければ彼の作品を理解することは絶対に不可能なのである。この兵舎の雰囲気というのが、傭兵然とした田舎の兵隊たちのせいであいも変わらず妙に中世的であったものだ。こういった環境のすべて—その陽気で輝かしい、しかも郷愁を誘うラッパの響き、むき出しの兵舎の壁にメランコリックに反響する夕暮れの帰営ラッパ、起床ラッパ、酒の歌、行進曲—それらのイメージや響き、そういったものすべてが子どもの魂に深く刻み込まれた。それらは長い年月の間にぼやけてしまってもおそらく半ば無意識の状態に復活し交響曲や『子どもの不思議な角笛』の多くのパッセージにその芸術的表現を見いだしたのである。」

グスタフの周りにいる人々は皆、彼が聞いたものをすぐに繰り返すその早さに注目している。3才になると彼は小さなアコーディオンをプレゼントされ、すぐに民謡や行進曲の膨大な彼のレパートリーを完全に演奏することになる、もちろんそれには兵舎のラッパの調べも含まれている。4才になったある日のこと、いつもは遠くで聞いている軍楽隊が家の窓下に行進してくるのを聞きつけた。朝まだ早かった。グスタフはまだ服をきていなかった、それで下着のままそっと家を抜け出て、自分のアコーディオンを抱え、楽隊の後を

ついていった。200メートルほど行くと市場のたつ広場に来て、彼は自分の無鉄砲さに恐ろしくなりはじめた、とそのとき隣家の二人の女性が彼に気がついて驚いてしまった。彼女らは彼を家人に気づかれずに家までつれて返してあげる代わりに、彼女ら二人のために軍楽隊のレパートリーの中から主だった曲を演奏するよう約束させた。彼はすぐに果物かごの荷台に座わって演奏した、すると行きかう人たちや主婦らが自然に集まって聴衆となってしまった。人々は彼を小さな英雄でもあるかのように中心に据え爆笑や喝采を浴びせかけ、彼の後をついて彼の家までいった、ところが彼の家では彼がいないことに気づいて本気で心配しているところだった。

マーラーの作品には彼が受けたイーグラウでの青春時代の印象がレミニセンスとなってあふれている。ボヘミア民謡の影響をとくにあらわにしているのは初期の歌曲だが、交響曲や円熟期の歌曲では、子供時代に彼が魅惑された軍楽を想起させることで思いがけない非凡な効果をひきだすことになる¹⁰⁾。この件に関して彼は別のおもしろいエピソードを語っている。夕方学校から帰ってくる途中彼は軍楽隊のコンサートにいきあう。その日は野外で演奏されていたのである。彼はあまりに熱中してしまったので地べたに座り込んでいたのだが、火急の生理的欲求を満足させるためにその場を離れるなどということもせずにいた、その結果彼は半ズボンを汚してしまったのだが、それがあまりにあからさまだったので、隣にいた連中は気持ちが悪くなって彼から離れていった。

この頃グスタフはレデツチュの彼の祖父のヘルマン家に数日の滞在でつれていってもらったことがある。当家の屋根裏部屋で隠れんぼをして遊んでいると一つの大きな箱に興味がかれた。まもなく何かの蓋の下に鍵盤を発見した、腕を頭の上まであげるとうまく鍵盤に手が届いた。このような窮屈な格好で、しかも小さな手で、彼はひとしきり歌の節やら民謡を何とか弾いた、とはいえ、それは驚くべきことであつたし正確だったものだから家中のものが集まってきてこの神童の周りを囲んだ。そこで祖父はグスタフに、自分の家にこんな大きなおもちゃがあつたらいいな、と思っているのかどうか聞いたものである。この少年の熱中する様を見て祖父は翌日イーグラウに牛車で運ばせた¹¹⁾。マーラーの子供時代に関係する話の中で最もおもしろいものの一つは彼が初めてシナゴークを訪れた頃の話だろう。彼は母のスカートの中に半分隠れて「やめて、やめて、美しくないよ」と叫んで教団の聖歌を中断させてしまった。首尾良くみんなを黙らせてしまうと彼はおもむろに自分の好きな歌を声をかぎりに歌いだした¹²⁾。

マーラーが初めてクラシック音楽と接したときの正確な情報がないので、初期の伝記作家たちはもっぱら以上の話を基礎に、彼の音楽的素質にある民謡風のもの、率直な自発性の起源を説明している。しかし今日では、彼が子どもの時からクラシックの傑作を相当数知っていたということが知られている。彼はかなり若いとき、隣家¹³⁾のテオドル・フィッシャーと友達となったので、音楽監督フィッシャー家に頻りに遊びに行った。マーラーはこの音楽監督から後に和声を学ぶことになるのである。ところでこの人物はサンクト・ヤーコブ教区の合唱とイーグラウの男声合唱協会の指揮をしており、この男声合唱団は毎週練習があり年に1回演奏会を開いている。当時イーグラウのキリスト教徒とユダヤ教徒はお互い仲良く暮らしていた¹⁴⁾。マーラーと同じようにイーグラウで育ったギード・アドラーによると、サンクト・ヤーコブ教区のカトリックの司祭とユダヤ教のラビであるJ.

J. ウンガーとの関係は非常によいものであった¹⁵⁾。マーラーはこの教会の合唱団に所属することになり後には伴奏ピアニストとして練習に参加しよう。

当時すでに彼は、とりわけベートーヴェンの『オリーヴ山上のキリスト』、ハイドンの『キリストの最後の7つの言葉』、ロッシーニの『悲しみの聖母』といったクラシックの記念碑的作品を見つけている¹⁶⁾。市長ペーター・エルンスト・レオポルト・フォン・レーヴェンタールの葬儀の際に演奏されたモーツァルトの『レクイエム』はこの12歳の小さな歌手に大きな印象を与えることにもなる¹⁷⁾。

成人してからのマーラーと知り合いになった人々はみな、少年時代のマーラーは神経質で、落ちつきがなく、傲慢で、手に負えない子どもだったと想像した、実際彼はそうであったに違いない—彼に《水銀》とあだ名を付けたのは彼の先生ではなかったか。事実そのときすでに彼の横暴な性格は彼の兄弟姉妹、クラスの仲間たちに向けられていた、とはいっても彼にはすでに公平さにたいする確かな感覚を持っており、忍耐、同情、慈悲の心も持ち合わせていた。とりわけ彼は限りない夢にふけることが頻繁にあった。時に彼の心ここにあらずという状態があまりに長く、深いものであったから、彼を正気に戻すために彼を両手でつかんで揺すらないといけなかった。両親や先生方は彼のこの放心状態を重大な過ちとして絶えず彼をいさめていた。このように他の子どもたちのように外の世界に耳目を開くことをしなかったために叱られていたことが、彼の青春時代の苦悩の一つとなった。

「このようなことで人がどれほど私を苦しめたかあなたには想像もつかないことでしょう、と後に、彼の友人であり相談相手でもあったナターリエ・バウアー=レヒナーに語る。人は私が放心状態にあったということで私に罪悪感を植え付けました。自分自身の内面性を豊かにするためにそのように集中するやり方を本当に必要とする子どもをそんなふうにあつかうのは親の過ちだ、と悟ったのはずいぶん後になってからです。

「私がおとなしく夢にふけていたことのおもしろい例として聞いた話です。まだ小さな少年だった頃、みんなが何時間ものあいだ私を探し回ったのだけども見つけれなかったことがありました。私はそのとき豚小屋にいたのです。たまたまそこに入ったのはいいのですが扉が閉まってあかなくなったものだから、私はそこにじっとしていました、どれくらいの時間がたったのかわかりませんでした、言葉も叫び声もあげずにいました。私を捜しに来た連中の一人が私の横を通り過ぎるまで一言も発しなかったのです。「グスタフ、グスタフ」という呼び声が聞こえてきたので「ほく、ここだよ」と全く満足気に私は答えたものでした。」

またあるとき、ベルンハルト・マーラーが彼をイーグラウの近郊に散歩に連れていったことがあった。家に何か忘れ物をしたことに気づいて父は彼をベンチに座らせ父が戻ってくるまで待っていなさいと言っておいた。グスタフのことをすっかり忘れてしまい、気づいて父が彼のもとに戻ってきたのは何時間もたった後のことだった、ところが彼は同じ場所に座ったまま、おとなしく、微動だにせず、辛抱しきれない様子など微塵もなくそこにいたのだった¹⁸⁾。

グスタフがこのように果てしない夢にふけるのは、神秘の呼びかけに答えるためだけでなく日常から逃れる必要があったからだった。両親の恒常的な不和、父親の空騒ぎや

荒々しき、家庭を暗くする何度もの葬儀、そういったものすべてが代替世界を想像するよう彼にしむけた。優しすぎる母親ともどもグスタフもまたときに父親の格好の餌食だった。引き出しが乱雑になっていれば必ずや叱られる口実になったし、さらには体罰もうけた。ところでグスタフが夢に耽ればふけるほど引き出しは開けっ放しになった。

ところがこの呆然とした子どもが5才をすぎて、いや4才の頃から、音楽の勉強に驚くべき注意力を示し始めた¹⁹⁾。早熟の才を示したとはいえ、これほど若い少年にまじめに音楽教育を受けさせようと彼の家庭が決定したその原因が何であったのか考えても良さそうである。さて、つつましい家庭にとってかなり重要な決定が下されたとき、フランツィスカ・マーラー（旧姓ベルマン）の影響力が多大であったようである。彼女はダヴィッド・マーラー [ベルンハルトの弟] の妻でピルニツァガッセからほど遠くないところに居住しベルンハルトとしばらくの間つきあいがあった、と記憶されている。ダヴィッド・マーラーの子孫の一人²⁰⁾は、グスタフが随分早くから彼の伯母であるフランツィスカの家にとこたちと遊ぶために毎日のように来ていたことを明かしてくれた。この伯母はおそらくマーラーの音楽の才を見つけた最初の人々の一人に違いない、しかもピアノのレッスン料を自分の財布から出してくれたのかもしれない。

テオドール・フィッシャーによるとグスタフの最初の先生はヤーコブ・スラツキーという名のコントラバス奏者だった。すぐにこの生徒は熱心さを示し並外れた情熱を傾けた。特に練習時間中彼のそばに母親が座っていると、彼女を喜ばせようと一層熱中した。間もなく別の教師が彼の教育に加わる。それはイーグラウ劇場の楽長フランツ・ヴィクトリンとヨハネス・ブロッシュという名のヴァイオリニストだったが、ブロッシュは1時間5クロイツァーでレッスンした²¹⁾。後にブロッシュは誇らしげに以下のように宣言する、これは彼自身が書いたものではあるがマーラーの署名がされている。「2、30年後にリヒャルト・ワーグナーはどこに行っても巨匠と認められ、メンデルスゾーンは完全に忘れ去られるであろう²²⁾。」おそらく彼の前でワグネリアンになった彼の元生徒の述べた意見が途轍もないものに思えたので彼は自らの手で書いておきたかったのだろうし、いつの日かそう言ってしまったことに彼が後悔するだろうとふんで、彼に署名することを強く望んだのだろう。

数年後グスタフはヴェンツェル・プレスブルクにピアノ、音楽理論、和声を学ぶことになる。彼はゼヒターとブルックナーの弟子で、イーグラウで教師になった²³⁾。プレスブルクは後にピアノの勉強に対する彼の専心したその熱中度を証言し、彼の語るところによると、レッスンはおおむねマーラーの家で行われ、ベルンハルトが同席して息子に鉄の規律を課していたそうだ。さらに後マーラーはハインリッヒ・フィッシャーに和声のレッスンを受ける。彼は教区の合唱団と男声合唱協会の指揮者で、グスタフの仲間のテオドールの父でありイーグラウの高校でソルフェージュの教授でもあった。

グスタフの進歩が非常に早かったので、6才の時、聴衆を前にピアノを演奏させることが決定した。この最初の演奏会はイーグラウの新聞には何も報道されなかった²⁴⁾がマーラーが後にナターリエ・パウアー＝レヒナーに語るところによると、彼の足がとても短かったのでペダルを動かすことのできるような装置を備え付けなければならなかった。その日彼に挨拶させることは全く不可能であった、というのは彼は一目散にピアノまで走ってい

って、椅子に座るや否や演奏し始め、曲が終わると今度は、聴衆の拍手も気にせず、力一杯飛び退いて逃げ去ったからである。

こうした早くからの音楽経験ともどもマーラーは読書も発見している、それは彼の生活に占める大きな情熱の一つでもあった。再び両親は無益な心配に気をもんだ。「両親はあらゆる手段を使って私の欲望を押さえつけ、私の精神にこれ程までに必要としている栄養を私から奪おうと必死でした。私の最も熱い願望は、いつも私の前におかれる障害や禁止のために決して満足させられませんでした。それは、昼夜、誰にも邪魔されず読書に耽ることでした。大人になったら飽きるほど読書してやるぞ、と何度誓ったことでしょう。

「これほどおさえこまれたので私はこの願望を静かに楽しむことができるための方法を見つけだしたのです。屋根裏部屋の窓から屋根によじのぼって、もちろんしっかりと自分の体に本の束をくくりつけるのです、そうやって何時間も平和に読書しました。切り立った傾斜の上で天と地の間にぶら下がっているから邪魔や罰から逃れているのだ、と考えたものでした。ある日まずいことに向かいの家の人たちが私に気づいてびっくりしてしまったのです。すぐに父のところに言いつけに来たので父は屋根裏部屋に駆け上がってきました。ところが私が屋根から落ちやしないかと心配して大声で私を呼びつけるわけにも行かず一時間ほどその場にいたということでした。やっと私が屋根裏部屋の窓にしがみついて窓からすべり下りると、私の生涯でも最も厳しく苦しい罰が待ち受けていたというわけです。私が落胆した最大のものは、屋根に通じていた窓が塞がれてしまったことでした。

「その後私の音楽に対する情熱はまったく同じように尽きることはありませんでした。毎週毎週私は図書館から、定期講読していたものですから、鞆一杯に交響曲やらオペラの編曲もの、サロン・ミュージックの小品などを詰め込んで帰宅したものでした。そうすることで私は筆舌に尽くしがたい幸福感に満たされていました、だから自分の好みを言うなんていうことはできませんでした、つまり私は奇妙にも、いや、まったく判断力を奪われていました。多分私の空想や思いつきがどんなにつまらない曲でもあらゆる種類の想像上の美を生み出したに違いありません、そうやって私の好みに従ってそれらの曲を変貌させ、補完したのでしょ。

「ある日私は先生に聞いてみました、どんな音楽が美しいのですか、ベートーヴェンですか、タウジツヒですか、と。残念ながら先生は答えられませんでした、先生も又そんなことを考えたことがなかったからです。その日以来私は図書館から帰ってくると持ち帰った楽譜を演奏したものです、持ってきた曲を次から次へと続けました、しかも一週間毎日同じことを繰り返しました、傑作を読むことで様々なものを得ようと思ったからです。誰も私をピアノから引き離すことはできませんでした、食事の時ですらだめでした。妹や弟を私のところに呼びにやったものです、母までもが来ました。私を従わせたのはいつも父の杖、それだけでした。そして箸をおくとすぐに私はまたピアノのところにかけ込んで夜までもそこにいたものです。ちょっと散歩してみよう、などと心を動かされることもありませんでした、散歩は大人になってからかなり高い評価を与えている楽しみにもかかわらず。私がむさぼり読んでいる本や楽譜から私を引き離そうとするものは何事も許すことができなかつたのです。

「それは内的な自意識が芽生える頃でした、子どもというのはその間に思春期を過ごし

ます。その通過儀礼のために私には多くの時間、豊富な精神的な糧が必要でした。私が自覚をもって生活し自ら作曲し始めたのは比較的遅くなってからです。それは当たり前で、人間の生というものは子供時代のこの重要な時期に吸収し同化したものによって潤されるからです。この年月に得られた精神的な経験、印象が私のそれ以後の生にその形式と内容をどれほど与えてきたか、毎日私は、少しずつよりよく、納得してきているのです。」²⁵⁾ マラーが簡単にベートーヴェンからタウジツヒに心を移し、最も凡庸な作品にも楽に思いつく限りの美で飾りたてるその能力は後に、『リエンツィ』と『トリスタン』、『ユグノー教徒』と『ドン・ジョヴァンニ』を同じ態度で、さらには同じように驚嘆の念をもって演奏することが彼には可能であったことで認識されよう。

何人かのマラーの先生はイーグラウの劇場のポストについていたので、彼は割引のチケットをとってもらったのは確かだろう。だからこのときいくつものオペラ作品を発見しているはずである。イーグラウの劇場²⁶⁾では1860年から1870年の間、オッフエンバックのオペレッタ『天国と地獄』『チュリパタンの島』『二人のサヴォワ人』『美しきエレヌ』『パリの生活』やドニゼッティの『連隊の娘』、フロトウの『マルタ』『アレッサンドロ・ストラデッラ』といった軽歌劇が演奏されている。勿論もっと重いもの、マイヤベーアの『鬼のロベール』、後にマラーの好んだものの一つであるロルツィングの『皇帝と大工』、シューベルトの『魔法の竖琴』も上演されている。1870年以後この小劇場のレパートリーはもっと大胆なものになる、『魔弾の射手』『ノルマ』『トロヴァドーレ』『ルクレツィア・ボルジア』『白衣の婦人』『ヨーゼフ』『エルナーニ』『ファウスト』、さらには『ドン・ジョヴァンニ』や『フィガロの結婚』も舞台に上がった。だから、1875年にマラーはイーグラウを離れてウィーン音楽院に入学することになるが、このとき彼の音楽知識はいままで言われてきたものよりもずっと広い。

マラーの先生たちは彼の特別な才能に逸早く気づいた。少なくともマラーから子供時代の話聞いたナターリエ・パウアー＝レヒナーによると、「揺り籠の時代から彼の天職は自明なものであり、彼にその天職に就かせるために、たとえばベルリオーズのように無益な労力と暇を浪費してしまわないように」彼に十分なチャンスが与えられた。実際彼に「勉強に必要な自由」が与えられ、「そのために家中のものがあらゆる努力しあらゆる犠牲をはらった。このときマラー家は厳格なしきたりに支配され、マラーと彼の芸術が家中の関心事だった。誰もがその才能の片鱗を少しでも見せてもらおうと努力したが、そのためにグスタフは彼の内気さを、後々までこの性格を彼は持ち続けることになるが、その恥ずかしさをのりこえなければならなかった。だから彼は彼の最も個人的なもの、最も神聖なものである音楽を他人に聞かせることを承知するために多大の忍耐を強いられたのであった。それで彼の兄弟姉妹、両親でさえ屈辱感を味わなければならなかった、というのは、彼が自分のために音楽するとなるといつでも何のこだわりもなく彼らを追い払ったからである。

「こうして彼に年齢ばかりか心情的にも最も近い弟であるエルンストとグスタフの間に奇妙なしきたりができあがった。エルンストは一日中《彼の下僕》として従事し、彼のほしいものを運んだり、彼の履き物や着るものを整えてやった、しかもぶつぶつ不平も言わずに、というのも、後でグスタフが彼のためにピアノを弾いてあげたからで、それが彼の

ご褒美だった。」²⁷⁾

- 1) その所有者は Lorenz, Katharina Wenzel (Häuser-Verzeichnis der Königl. Kreis-und Bergstadt Iglau, 1864) .
 - 2) Bezirksgericht Iglau. Grundbuch 256-292. fol. 10a Haus no 264, Stadtarchiv Iglau, Verlassenschaft Familie Heinrich Fischer, Musikdirektor. Heinrich FISCHER : 1828年6月28日イグラウに生まれる。プラハ音楽院出身、1870年、イグラウ市立楽団の指揮者、男性合唱団およびイグラウの主要教区の合唱隊の指揮者。マーラーの先生となる人物の一人。彼は1868/1869、1873/1874、1875/1876のシーズン、市立劇場の指揮者を勤める。この章に含まれるかなりの数の情報は彼の息子である Theodor Fischer の《Aus Gustav Mahlers Jugendzeit (少年時代のマーラー)》(Deutsche Heimat, VII, 1931) と題された記事から得ている。
 - 3) 警察調書でも、ベルンハルトが彼の家のとなりにカフェを開いた正確な日付は判らない。
 - 4) この家は現在も存在する。ベルンハルトが死んだとき書かれたこの家に関する細かい図面がある。Stadtarchiv Telc. Bezirksgericht Iglau IV 1889/17 Todesfalls-Aufnahme Bernhard Mahler.
 - 5) マーラー時代のオーストリー＝ハンガリー帝国の地図参照。
 - 6) アルノスト・マーラー《Gustav Mahler und seine Heimat (グスタフ・マーラーと彼の故郷)》からの引用。この引用文はフェルスターがチェコ語の新聞 Narodny Listy に友人マーラーについて書いた記事の一つから引用されたものに違いない、というのは、彼の回想録『巡礼者』でフェルスターは、マーラーはチェコ語が理解でき、彼の目の前でスメタナの歌劇『売られた花嫁』のドイツ語テキストに、彼がオリジナルに忠実ではない箇所と思われるところはどこでも修正を施していた、と書くにとどめそれ以外の言及はないからだ。『売られた花嫁』のドイツ語テキストの作成者であるウィーンの批評家マックス・カルベックは、後にマーラーと知り合うことになろうが、マーラーは「チェコ語のテキストを理解」していると証言している。マーラーが自分の生まれ故郷の言語に精通していることを証言しているものは今のところこれだけである。
 - 7) この点に関しては VKM (Vladimir KARBUSICKY : *Gustav Mahler une seine Umwelt*, Wissenschaftliche Buchgesellschaft, Darmstadt, 1978) 参照。これにはマーラーが聞くことの出来たスラヴの歌と、意識的であれ無意識的であれ彼に着想を与えた歌の完全なリストが作成されている。Ernst KLUSEN : 《Gustav Mahler und das Volkslied seiner Heimat》(Journal of the International Folk Music Council, vol.15, 1963, p.29) も参照。テオドール・フィッシャーは『第一交響曲』の葬送行進曲にはイグラウ近隣に最も特徴的な民衆舞踊の一つである Hatschô に驚くほど似ていることを指摘している。David Mahler の孫娘である Edith Schachter-Mahler 夫人は彼女の祖父にはやはり Nanni という名でグスタフ・マーラーにチェコ民謡を教えた女中がいた、と筆者に教えてくれた。
 - 8) VKM p.35.
 - 9) VKM p.44.
 - 10) Max Graf : *Legende eniner Musikstadt*. p.71. 参照。グラーフはさらにオーストリア軍の古い軍隊ラッパ信号はミヒャエル・ハイドンの作であり、その帰営ラッパの信号はマーラーの第三交響曲ばかりかベルクの『ヴォツェック』でも使われている、と主張する。マーラーの中に大ハイドンの弟が作曲した信号の反響が聞かえる、という考えは大いに魅力的である。ただ残念なことに今日ではそれらは作者不詳であることが立証されている (MGG, V, 1942) .
 - 11) NBLs (Natalie BAUER-LECHNER : *Mahleriana*.)
 - 12) 同上
 - 13) テオドール・フィッシャー、上掲記事参照。彼は1859年11月1日生まれ、後に地方裁判所長、ついで郡裁判所裁判長になり、1934年10月15日死亡。
 - 14) アドラー『グスタフ・マーラー』p. 8
 - 15) Guido ADLER : *Wollen und Wirken*, p.17.
 - 16) Cf. Theodor FISCHER : *Das Musikleben Iglaus im 19. Jahrhundert*, *ibid.* それらの演奏はイグラウの新聞 (*Der Vermittler*, 後に1872年に、*Mährischer Grenzboten* になる) で言及される。『オリーヴ山上のキリスト』は1870年、『悲しみの聖母』は1872年、1873年、『最後の言葉』は1874年にそれぞれ演奏された。
 - 17) この葬儀は1872年4月2日に行われた。
 - 18) NBLs 参照。マーラー『書簡集1879-1911』p.VIII.
 - 19) マーラーは6歳の時にコンサートを開くことになる、ということは少なくともそれより1、2年前からすでに勉強を始めていた可能性は高い。
 - 20) この人物は Edith Schachter-Mahler 夫人で、現在ロンドン近郊にすんでいる。ダヴィッド・マーラーは兄と同じく醸造業者だった。彼は1874年にウィーンで新たに醸造所を開くことになる。
 - 21) ZND (Zdenek NEJEDLY : *Gustav Mahler*) はこのほかに J. Ziska (Žižka) という名の教授をあげている。この人物はヴァイオリニストであり、イグラウの男声合唱協会の音楽監督でおそらくフィッシャーの友人であろう。
- Franz VIKTORIN は1864年から1865年に、そして再び1868年にイグラウ劇場の首席楽長として名を連ねている。1870年にマーラーが開いたコンサートに関する記事によると彼は町を離れていたことがわかる。事実彼は1868年以降ブドヴァイス、クラコヴィ、ビーリッツ、ブダペストで指揮をしている。それ故おそらくマーラーの先生としてはプレスブルクがその任に変わ

ったであろう。Iglauer Sonntagsblatt 紙にヴィクトリンとヨハネス・ブロッシュは1869年11月28日ピアノとヴァイオリンを教える「音楽学校」を開校する旨を公表する。

22) この挿話はニューヨーク大学のエーリック・ウェルナー教授からうかがったものである。教授はブロッシュのチェコ人の弟子である Franz Kralicek から聞いた。この人物はオストラヴァで弁護士になりブロッシュからこの資料を贈られた。

23) Wenzel PRESSBURG (1842-1906) ウィーンで生まれそして死ぬ。1883年8月10日、当時マーラーはカッセルの劇場で指揮者をしてしたが、プレスブルクに彼の要請に応じて、マーラーが数年間彼の弟子であり、指揮者として、ピアニストとして、教育者としての能力を証明する文書を書き送った。この資料のコピーは後にウィーンの Musikerziehung 誌上で公表されよう(1949)。この雑誌に公表された小伝で言っていることとは反対にプレスブルクはブルックナーの弟子ではなかった、いずれにしても音楽院では違っていた。彼は事実を曲げてまでもかなり自己宣伝に腐心していたようだ、というのも彼に関して公表された情報はマーラーの証言も含めてすべて偽りである。1870年10月20日ベルンハルト・マーラーはイーグラウの新聞 Der Vermittler にプレスブルクに対する《感謝広告》を発表している。それは「子どもに音楽を学ばせたい親すべて」に彼を推薦する、といった類のものなのである。プレスブルクは後にウィーンに居を定め、教師の仕事が続けたくさんのワルツを作曲することになる。(Cf. Illustriertes Wiener Extrablatt 1899年3月1日号)

24) ここでもまたマーラーの記憶は正確ではないと言えなくもない。これは実際には1870年のコンサートのことに違いない。

25) NBL. Karl TAUSIG (1841ワルシャワ-1871ライプツィヒ) オーストリアのピアニスト、作曲家。はじめ父にピアノの手ほどきを受けるが1855年リストに弟子入りする。1858年からリストの勧めを受けコンサートツアーに出、リストやワーグナーの作品を演奏した。またブラームスやハンス・フォン・ビューローの知己を得る。1865年からはベルリンの宮廷ピアニスト、ピアノ学院の校長として当地にすむ。ビューローやグルベールとともに、リストの様式に最も近いピアニストの一人である。

26) WURZINGER: *Geschichte des Iglauer Stadttheaters*.

27) NBL.